

かくして天皇陛下の終戦詔書です。小月飛行場にて
全隊員と悲涙に咽びました。

現役軍人終焉

昭和二十年九月三十日待命予備役。

戦後、妻の実家の山口県岩国と私の故郷佐倉を往復
して生活していました。

帝国人絹株式会社（現帝人）が守衛を募集しており
ましたので、ここに就職しました。そしてテトロン部
門が愛媛県松山市に松山工場を建設することとなり、
私もそうした縁で松山の住人となりました。そして戦
後の難関を乗り越えました。

振り返りますに、多くの人々が戦争の犠牲となられ
ました。護国の英霊の泰らかな眠りを心より祈念申し
上げます。合掌。

追伸 北に南にと飛びまた走り、五体無事に任務を
終了し、八十余歳までも長生きしました。

当座なすべき御奉公ができず、十分な活動もなく、
不忠不孝につきましては、いかように申されまして

も、甘受致します。

不戦を誓い二度と戦いの無きを願っています。

私だけの人生

特別攻撃隊員

岩手県 加美山 茂

昭和二十（一九四五）五月十七日、基地副長、岩城
中佐より「菊水作戦に参加するために明朝鹿屋に移
動、出撃するようにせよ、隊の編成は四機とする。
しっかりやってくれ」との命令と激励を受けた。しか
るべき時が遂に来たと、頭の中が白くなるような思い
がした。

翌十八日、朝四時起床、といってもほとんど前夜は
眠れず過ぎしたが、列機の搭乗員に声をかけ、それぞ
れ身支度をして防空壕のベッドから隊舎の食堂に行
き、主計課心尽くしの朝食を摂り、残る隊員達に囲ま
れて、声を掛けられ励まされ飛行場の戦闘指揮所に

行った。

戦闘指揮所には岩城副長、湯野川飛行隊長、分隊長等の幹部が勢揃いしており、指揮所の前にはテーブルが横に置かれ白いテーブルクロスが掛けられ、上に恩賜の酒「菊正宗」と皿の上に焼いて引き裂いたスルメが置いてあり、片側には四個、そしてその向かい側には見送りの隊幹部の分の湯飲み茶碗が支度されていた。

前日までに私が整備員とできるだけの整備をした零戦は、既に燃料と一部弾薬を搭載してエンジンの暖気運転を開始していた。

五時、私は戦闘指揮所の前に列機隊員と横一列に並んだ。富高基地の当時の最高指揮官岩城副長に対して申告した。

「加美山少尉他三人。菊水第〇作戦遂行のため鹿屋基地に転進、沖縄攻撃に備えます」。

その時副長からは、確か次のように言われたと記憶している。

「必ず任務を遂行し、戦果を挙げ、全軍の亀鑑と成

るように心掛けよ。お前達の働きは後に続く者達の目標になるのである。尚出撃については、鹿屋到着後現地七二一空三〇六飛行隊の命令をうけるように」

と申し渡された。そして、テーブルについて、各自の茶碗に酒を入れ、「武運長久を祈る」と言う副長の音頭で乾杯をし、スルメを噛り、酒を干して最後の挨拶をして、それぞれの飛行機の所に行き、四人が集まって手を握り合った。

秋元少尉以下笠間、橋本、青戸少尉達は特に別れを惜しんで、一緒に行けないことを悔やんで、細々とした世話をしてくれた。その時、誰かが写してくれた写真の後日今は故人となった佐瀬恒雄氏から頂いて、富高時代の唯の一枚の写真として残っている。

〇五三〇、皆が帽を振って見送る中を私を先頭に地上滑走を始め、列機がこれに続いた。大候は最高に良く、朝日が水平線から上がり始めていた。

私は旋回して太陽に向かったとき、太陽に重なって母の姿を見た。

「かあさん」と思わず大声で叫んだことを思い出

す。もちろんこれが最後だと思つてのことであり、鹿屋に行けば直ちに爆弾を搭載して沖繩に出撃しなければならぬと覚悟していたからかもしれない。そして単座の戦闘機でありエンジンの轟音で自分にすら、その声は聞こえなかったが、当時としては女々しいと考へ思わず周田を見回したことが思い出される。

数十分の飛行の後鹿屋に到着したが、上空から見た鹿屋は今まで見た飛行場より広く、また周田の掩体壕への引込線等も多く、また着陸している飛行機の機種もいろいろで、大型機も見えていた。それらの間に着陸した後、作戦の都合で残留していた三〇六の隊員が迎えてくれた。そして戦闘指揮所に案内してくれ、整備に連絡して整備員の誘導で飛行場から外れた松林の中の掩体壕に飛行機を収容してくれた。

戦闘指揮所に行き申告したら、状況の変化により別命あるまで待機するよう申し渡された。瞬間緊張の糸が緩んだような、一時的にはしろ当分は生きられると思つたのが本音だつた。

直ちに七二一空が駐屯している飛行場から離れた野里という部落に車で送られた。到着するとそこは小学校で生徒は別の所に移り、校舎はその当時、隊の本部、士官室、隊員宿舎、食堂等として使用されていた。

林少尉が迎えに出ていて「分隊士、有り難うございました。親父とお袋が是非お目にかかつて、お礼を申したいと待ち兼ねております。会つてやつて下さい」と言つていた。

教員室を使つていた士官室に挨拶して、隊員が屯ろしている教室に行き、残つていた隊員と再会の喜びを分か合つた。驚いたことにその中に先日会つたばかりの町田少尉のお母さんがおられた。私は懐かしさよりも驚きのほうが先だつた。「どうされました?」。後になつて私はなぜこのような無神経なことをこの時、口にしたのか反省したが、全くの驚き以外何も無かつた。

町田少尉のお母さんは何とも表現できない、気の抜けたような、縋り付きたいような目を向けて私を隊員

達の後から見詰めていた。

隊員達は富高でのことは知らないで、私とこの方が面識が有ることは誰も知らないことであつたので、私が「町田さん、どうしてここに」と声を掛けて隊員の後に隠れるような背の小さなその婦人の所に行くと、十四期予備学生で町田少尉の同期の連中が二人を取り囲んだ。私に来るまでは、この連中が町田さんと話し合っていたのだった。

「加美山さん、富高では大変お世話になりました。お陰さまで無事に博多に帰りつきましたら、鹿屋から道教が出しました手紙が届いております、富高では貴方から沖繩に出撃したと聞きましたけれど、お疑いするわけではなかったのですが林さんの事もあつたものですから、本当に藁にでもと思つて、先程着きました皆さんから話を聞いていたところでした。でも貴方の言う通りで会えませんでしたが、皆さんの話を聞くことができました」と私の手を取つて複雑な表情で微笑まれたが、私には答える言葉が出なかつた。

「途中汽車は大丈夫でしたか、一人で米られたので

すか？」と漸く声を掛けた。

確か富高で会つてから四日位だつたと思うのだが、町田さんは何となく何年も老けこんだように見えた。

「この前と同じに娘と一緒に参りました。途中は大変でしたが、幸い空襲にも遭わずに来ました。娘は道教がやはりいないと聞いてどこかへ出て行きました」私はすぐに捜しに出た。周りの田圃の畔には蓮華草の紫紺の花が今を盛りと戦争も知らぬように咲いていた。

その中に膝を折つて蓮華の花を摘んでいる少女の寂しげな、本当に小さく見える後ろ姿があつた。側まで行つたが私は何と声を掛けたいか迷つたが、彼女のほうが私に気付いて、涙を拭いて立ち上がり、私の方を見たが私が誰であるか気が付かないようだった。当然である。夜中の遭遇、しかも氣も漫ろな別れに記憶に残ることは別のことだつたと思うのである。

私は戸惑っている少女に声を掛けた「町田さん。富高でお目に掛かつた加美山ですが、今お母さんに会つてきました。大変でしたね」。はつとして私を思い出

したらしく、「だって手紙が来ていたんですもの、もしや林さんのように思っ取り敢えず来てみたのにやはりいけませんでした」と、田の畔に座り込んで声を上げて泣き出したのだった。

慰めながらお母さんの所に戻り、町田少尉の同期の戦友がその晩、鹿屋市内に宿を取り皆で思い出を語り合うことにした。

私は林少尉の案内で彼の御両親が部屋を借りているという農家の離れに行ったが、見えて分かったらしく、お二人で玄関の板の間に膝を立てて座り丁寧に頭を下げられて、「本当に有難うございました。お陰さまで息子に会うことができ、しかもこの数日は食事を作ってゆったりしております。何とお礼を申し上げて良いものかと思っております」とのこと、御両親が岐阜から持ってこられたというお茶をご馳走になり隊舎に帰ったが、町田さんのことを思うと正に万感胸に迫るものがあつた。

その晩も特に作戦上指令はなく、翌朝、昨晚上陸し

た連中はまだ頭が痛いなどと言っていたが、私に必ず町田さんに会いに行ってくれと念を押していた。

その晩、私は一人で鹿屋荘に出掛け、明け方まで町田さんは息子のそして兄のことを語り、また私の家族のことを尋ねて、私も今まで初めてというくらいに心を聞いて父母のこと、兄弟のこと等を語って、時間の経つのも忘れて話し合ったことを思い出す。

そしてその翌日には町田さん親子は鹿屋を後にされ、またその数日後林さん夫妻も名残り惜し気に鹿屋の地を去られた。

その隊には報道班員として、当時著名だった作家の山岡荘八とか新田潤、北村小松さん、そして画家としては江崎孝坪さん等が私達と生活を共にしながら、私達の一挙手一投足に関心を示していた。

山岡さん達は校庭の隅の小さな小屋にいて庭の柿の葉に墨で「神雷」と書き、その後雨で墨が流れた後に「神雷」の字がクッキリ浮かび上がるといふような事をやっていた。

また北村さんには青森の出身のため特に親しくしてもらい、私が出撃した後は私の記録物はすべて彼にやることに約束していた。

新田潤さんは大変陽気な大酒豪で、酔いが回ると独特なスロウテンポのダンスで私達に溶け込み、ジャズやタンゴも、原語で歌ったりしていた。当時、海軍では言葉などは特別に厳しく取り締まるという事はなかった。音楽とか映画などについては報道班の方達も一緒に楽しんでおられた。

この方達は戦後も活躍しておられたが、皆さんその後思い出を語り合う機会も無のまま、既に鬼籍に入られてしまった。

五月末日付けで私は「海軍中尉」に進級し、翌六月一日、私はか数人が基地内の上官達の所に挨拶をして回った。進級した者達は親元や知人に連絡をしたりしていたが、私は連絡しなかった。

私より後に鹿屋に来た秋元も一緒に進級したが、「何で加美山は手紙を書かないんだ」と私をなじり、

私は何も答えなかったが、私は私なりに、もし私が連絡したら、林さん御夫婦はこんな危険な九州の果てまで、空襲で途絶している所は何時間も歩いて、途中で空襲に遭う恐れもある所に、万難を排しても来てくれるだろうと思うとその危険を冒させる事はできないと思っていた。

私は筑波を出てから家には全く手紙を書いてはいなかった。年齢二十二歳の私が、どんな因縁か一緒に行動し生死をも共にしなければならぬような部下を預かったという、言ってみれば責任感のようなものが、皆私より年長でしかも学歴も上の人達の運命を左右することになると思うと、誰にも言われない苦しさを感じられて、せめて家族に会いたいと言う気持ちを我慢する位のことでは耐えなければと自分に言い聞かせて、できるだけ快活に家族のことは考えないことにし、至って朗らかに隊員には酒豪の隊長と言われるようになっていた。

野里では風呂はドラム缶で沸かし、従兵が背中を流

してくれた。その人の年齢が父ぐらいだったことも気に掛かることの一つであった。

秋元の連絡で彼の夫人が面会に現われた。旅館にいると言うことで、私も秋元と一緒に会いに行ったが、夫人は私を見るなり、「加美山さん、私は秋元から手紙をもらうと直ぐに、当然貴方も家に手紙を出していると思って、お誘いするつもりで盛岡まで行って来ましたよ。貴方はお家に九州へ来てから一度も手紙を書いてないそうですね。貴方のご家族は貴方の気持ちは九州に行ったときから、何か私達に分からないことが起こっていると思うので、今更出掛けてその気持ちを書いても悪いから行かない。とおっしゃって居られましたよ。今からでも連絡を取りなさい」と言ってくれた。姉が弟を諭すような口調は私には嬉しかった。わざわざ盛岡まで行って、様子を見てきてくれたことには、全く感謝のほかなく、本当に有難かった。しかし、私はその後も故郷には連絡はしなかった。

鹿屋への敵機動部隊の空襲は日を追って激しくな

り、私達の隊にもいつ出撃命令が出るかわからない緊迫した毎日が続いた。

ある時は艦載機が低空で野里の旧校舎（我々の宿舎）に機銃掃射を掛け、弾痕が屋根や壁面に残り、またある時は搭乗員の顔がはっきり見える程の低空の飛行のこともあり、余りの「人も無げの行動」に切齒扼腕しながら防空壕の出入口からこれを見上げていた。

戦局はさらに逼迫し、沖繩の戦線は敵の制空権の範囲が奄美大島南部まで及び、鹿屋基地もますます危機感を強めていた。

神雷部隊桜花隊の母機「一式陸上攻撃機」の機長である盛岡高等工業学校の科は違うが、同年卒業の三浦北太郎少尉と時々会う機会があったが、彼は沖繩に対しての桜花攻撃成功の生存者としての希少なそして重要な人物であった。彼は余り能弁でなかったが、その時のことになると「丸大（桜花）の威力は凄いものだぞ。敵巡洋艦を発見し、桜花を投下して反転し、グラマンの攻撃を回避して投下数分後に目標の船を見たら、完全に轟沈されていたよ。こんな完璧な戦果はな

いよ」と桜花に搭乗して体当たり自爆大戦果を上げた搭乗員を讃めつつも、同行した攻撃隊の被害の多いことには全く言及しなかった。三浦北太郎も五月に私と一緒に中尉に進級した。

沖縄周辺の海上は敵艦船に完全に制圧され、飛行場も敵が使用し、ここから発進する敵飛行機により九州各地が空襲を受ける恐れが多くなって来て、被害が続出するようになった。

沖縄「玉砕」の恐れありということで、海軍第七二一航空隊、他の航空隊が昭和二十年六月二十二日に沖縄周辺に集結している敵艦船に攻撃を行うことになり、早朝より第五航空艦隊司令長官宇垣纏中將以下の幹部が鹿屋飛行場の戦闘指揮所に出動した。そして丸大を抱いた一式陸上攻撃機が、重い機体を飛行場のエンドすれすれに日の出前の南海日指して次々に離陸して行くのを、私は地上にいる整備員と共に帽を振りながら見送っていた。

出撃して行った一式陸攻の中には、三浦北太郎中尉

を機長とする機も入っていた。

また筑波空以来苦楽を共に生活してきた三重出身の川口光男中尉外七人も、五二型零式戦闘機に五〇〇キロ爆装をして南溟の空に消えていった。

私達残留隊員は出撃隊員を送り出すと、直ちに防空壕内に設置されていた通信室に行き、出撃隊員からの連絡の信号に全神経を集中して待機していた。信号はすべて略号で、一番初めに自己の符号を送り「敵機に遭遇」「敵空母を発見」「敵戦艦を発見」等などがあり、その後に「トトトット」で「我敵艦船に突入す」と発信することになっていた。

出撃してから速度と距離を計算して今頃は屋久島、または奄美通過と判断して待っていた。「敵機に遭遇」の信号があつて皆が緊張したが、その後の入電はほとんど無く、既に燃料切れの時間が過ぎている昼頃まで、食事のことも忘れて信号室の前に呆然と立ち尽くしていた。

私は夕方まで信号室の前で緊張しながら信号員の一挙手一投足も見落とさないようにしていたが、遂に

「トトトット」の信号は一つも入って来なかった。

後日談になるが、一機が屋久島南方に不時着し、搭乗員が後日無事帰着したということがあった。

私の高等工業の同級生の小澤氏が、この作戦の護衛戦闘機隊の一員として、当時戦闘機パイロットとして彼我に名の知れていた林八太郎中尉の列機として鹿児島から出撃した。佐多岬上空で、攻撃隊、爆撃隊、爆撃機隊が集結して沖繩目指して南攻する作戦だったが、何かの錯誤のため連携が上手く行かず、結局陸攻隊は護衛なしで南下したらしかったし、爆撃隊もその通りだったようだ。

小澤氏の話によると彼の所属する護衛戦闘機隊が高度三〇〇〇メートルで進撃していったところが、前方から正に無数の敵グラマン戦闘機の編隊が現れ、たちまち激烈な空戦になり、九死に一生を得て林中尉と共に生還したが、あの時のことを思い出すと言葉では表現できない、恐ろしいと言うか無心だったと述懐し、その時の攻撃隊の中に三浦北太郎中尉がいたことは戦後私から聞くまでは知らないでいたと、ある戦友会の

会合の時、特別に感慨に耽っていた。この作戦の直後沖繩は玉砕した。

さらに四、五日たった後のある日、宿舎にしていた民家の縁側に二、三人の隊員と腰を下ろして雑談しているとフラリと軍医大尉が庭先から入って来られ、私達は起立して挙手の礼をしたが、良く見たらその軍医は、私が中学校のしかも柔道部で入学した時、五年生だった先輩の三浦新也さんだった。私は早速名乗り三浦先輩も当時のことを思い出してくれて縁側に並んで座り、先輩の言葉を待った。

「ここは神雷部隊だよな」

「はい。そうであります。私達は神雷爆撃隊であります」

「桜花隊はここにはいないのか」

「部隊は同じですが宿舎は違います」

「三浦北太郎はどこにいるか分からんか」

私はドキンとした。その時のことを思い出すと今でも、何とも言い表わせない気持ちになる。

そうだったのである。三浦北太郎中尉は、三浦先輩の身内だったことをこの時私は思い出して慄然としてしまった。私は思わず立ち上がって「北太郎はもうおりません」と言ってから、ハッと気がついて（私は何を言っているんだ。三浦大尉は北太郎の身内の方なんだ）「六月二十二日の作戦で沖繩に出撃して帰還しませんでした」と上官に申告するときのように申し上げた。一瞬、三浦大尉の顔に動揺が走ったように見受けられたがすぐに平静になられて「そうか、遅かったか。加美山は送ってやってくれたわけか」と話されて、暫く絶句しておられた。

私は何か話してお慰めしようと思い、前回の攻撃に未曾有の戦果を挙げて奇跡的生還をし、その経過を唖々として語ってくれたことなどを話した。領きながら聞いてはおられたようだったが恐らく耳にははいらなかったのではないかと思われた。話し終わって帰って行かれる時の後ろ姿が思い出される。

戦後三浦さんは盛岡で医院を開業され、岩手県医師

会会長等もやられたが、ある会合の際にその時の話を申し上げたら、当時のことを思い出されて「北太郎の父親が健在だから是非会ってやってくれ」と言われた。しかし、なかなか機会に恵まれず、そのうちにお父上はご他界されたとのことを風聞して残念に思っている。

〔編注〕

加美山茂氏の体験談は第XI巻及び第XII巻にも掲載されております。

海軍航空隊

大空に憧れて（一）

愛知県 榊 原定夫

青少年のころ

私の父は、牛・馬車はじめ普通の荷車などの製造と販売を業としていた。私は父の長男として大正十二